

様式

若手研究者育成支援費に係る研究成果報告（ホームページ用）

	(所 属)	(職 名・学 年)	(氏 名)
研究者	京都府立大学 生命環境科学研究科	博士後期課程2回生	吳昱瑩
研究の 名称	台湾日本時代における原住民集落の移住と家屋改善に関する研究		
研究のキ ーワード	改造蕃屋、理蕃政策、台湾原住民、台湾総督府、アミ族		
研究の 概要	<p>本研究は日本時代における台湾原住民集落と家屋の改善に関する研究である。本研究からは、戦前の日本植民地住政策の一環が判明した。特に本研究の対象は、台湾の少数民族である原住民であり、戦前から日本の調査は行われていたが、伝統家屋など伝統習慣と物質調査であり、本研究の扱う住環境の変容の実態研究については少ない。本研究は台湾現地での史料調査と現場調査から、「アミ族」を一例とし、戦前考案された「改造蕃屋」の実態と、それが戦後初期までどう影響したのか、そして集落移住の状況について明らかにした。</p> <p>研究の結果、「アミ族」の「改造蕃屋」は三列型平面、炊事場及び附属屋を主屋から分離させること、宗教空間の設置など、アミ族の伝統である一室住居を、機能的に分離させたことが最大の特徴になる。戦前の台湾総督府は、住環境の性能向上、日本化の生活を推進を強調したが、結局戦後へは前者だけが保留され、後者は消失したか、空間の意義が転移した。</p>		
研究の 背景	<p>日本統治時代の台湾では、原住民（先住民を台湾ではこう呼ぶ）に対して国策により強制的な集落移住と伝統的住居の家屋改善政策が進められた。その過程で集落が集 中され、集落施設を整え、及び「改造蕃屋」と呼ぶ新たな住宅が考案された。</p> <p>しかし台湾原住民の住居に関する関心は、今なお専らそれ以前の伝統的なものに向けられ、戦前からの日本側の原住民に対する住宅政策の実態は、改造蕃屋の存在を含め殆ど知られていないし調査の実績も乏しい。これら住宅の多くは現在も多く残り、原住民の重要な住宅形式として存在し続けている。そこで本研究では、台湾原住民が当時の家屋改善政策をどのように受け止め実際の民家建築に反映したのか、民家の構造とその変化に焦点をあてて明らかにすることを目的とした。そのために本研究では、当時原住民の中で最も人口が多かったアミ族を事例として取り上げる。</p>		
研究手法	<p>今年度の研究は、台湾のフィールド調査と史料調査を中心とした。フィールド調査は台湾東部の花蓮県と台東県の「アミ族」の「改造蕃屋」の遺構を調査した。台湾東部の「アミ族」を調査した理由は、「アミ族」は台湾原住民人口の最多数であり、「アミ族」の居住している台湾東部は近年の地震や風水害の被害が比較的少なかったからである。その結果、重要家屋を5集落、8棟（内戦前4棟）を実測調査し、建物の図面と現状写真、古写真、聞き取り調査を行った。</p> <p>史料調査は『台湾日日新報』、『理蕃誌稿』、『須知簿』、『アミ族教化指導ニ関スル基礎調査』（以後『アミ族基礎調査』）、などの諸資料を分析した。特に『アミ</p>		

『族基礎調査』は、1930年に当時アミ族居住地域を統治していた花蓮港庁が行った官方調査で、内容は衣食住、教育、習慣など9項目がある。家屋の項目では、アミ族の伝統建築についての配置図と平面図の採集、日本時代以来アミ族家屋建築の変遷傾向、そしてアミ族の伝統建築の欠点及びそれに対する改善提案、さらに二つのモデルプランがあげられている。

そこで、実測調査の結果と『アミ族基礎調査』を分析し、アミ族の集落と家屋変遷の過程を分析し、当時の家屋改善政策をどのように受け止め実際の民家建築に反映したのか、民家の構造とその変化及び集落の変容についてに焦点をあてた。

研究の進捗状況と成果

戦前の『アミ族基礎調査』から、アミ族伝統の茅草壁家屋の特徴である低い軒下、掘立柱、単室プラン、草壁、炉などが全面否定された。そして改善すべき要点を、10点あげている。これは伝統建築に対して、全面的な改善方針であり、衛生、防火、採光、風紀



図1 日本時代アミ族家屋モデルプランその一

の観点からである。二つのモデルプラン（図1）を纏めると、三列型平面が特徴的である。そのほかに、炊事場、附属屋を主屋から分離させ、神棚と押入を設ける。すなわちアミ族の伝統である一室住居を、機能的に分離させたことであることが、本研究の分析で明らかになった。

実測調査の中、花蓮馬太鞍01（図2）はと台東池上01（図3）は、上層家庭の家屋の遺構であり、保存状態も良いことから、重要性が見られる。



図2 花蓮馬太鞍01



図3 台東池上01

花蓮馬太鞍01の築年は約1924年で、形式は鉄板葺、切妻、平屋建、下見板壁である。正面の下見板は改造されているが、漢人民家の形式が見られる。小屋組も漢人の形式である。元間口は5間あったのだが、戦後1970年代分家で、両端を取り壊した。美観のため同時に棟高を45cm縮めた。附属屋は炊事場、浴場、豚小屋、穀倉、堆肥舎、牛舎があったが、現存せず。

台東池上01は寄棟、編竹石壁で、一般のアミ族家屋の形式と異なる。下屋柱は石造であり、意匠も西洋のオーダになっている。これは建造当初、家主が最新の材料と意匠を求めたためである。後庭に豚小屋、牛小屋が現存しており、前庭に池が現存している。形式、技術、保存状態などから、重要な位置づけが求められる。

実測調査と『基礎調査』を纏めると、現場の遺構は平面形式、附属屋の設置などの点で『基礎調査』が定する形式を受け継いでいた。しかし屋根下地は現代でも茅と竹

	<p>にすところが多く、伝統とあまり変わっていない。日本時代設置された神棚は、現在ほとんどがキリスト教派に変わっている。各事例の小屋組と軒下の形式を築年と形式から考察してみると、戦前のは漢式が多く、意匠にもこだわっている傾向が見られ、戦後のは簡素である。</p> <p>アミ族の移住については、あまり移住されていないことが明らかになった。これは統治当初から、総督府はアミ族を「普通行政区」に区画し、他民族と異なる待遇を受けていたからである。移住政策はタイヤル族とブヌン族が主な対象であり、アミ族はあまり強制移住をされていないことが明らかになった。</p>
地域への研究成果の還元状況	<p>フィールド調査した5集落の中、花蓮春日集落では、地元の方々との共同研究で、春日集落の歴史と家屋構成が明らかになった。</p> <p>春日集落の多数人口はアミ族であり、山を背後にして、秀姑巒溪東岸に古くから立地している。1937年警察駐在所が開設された後、部落の有力者に「改造蕃屋」を建てさせ、主屋と粗小屋、便所などの形式について規定した。日本時代当部落の人は台湾東部の公共施設を建てに強制的に出稼ぎをされていたが、その技術は当時と戦後初期の下見板「改造蕃屋」技術に影響を与えていた。</p> <p>春日集落には伝統的な家屋構成と集落景観がまだ残っており、集落領域の言い伝えや、伝統的な社会組織「年齢組織」がまだある。伝統を知っている方がまだ残っており、地元の方も集落文化の保存に熱心である。今年度の調査では、重要家屋の実測調査と、老人の聞き取り調査を行い、今後は、集落歴史文化推進の参考資料として役立つ予定である。</p>
今後の期待	<p>本研究は、研究者が台湾人であることから、大量な台湾現地の史料と、現場の実測調査が出来た。民家の構造や変化に焦点をあてたことから、民家研究の一環として重要である。そして史料調査と実測調査の結果から、戦前の「改造蕃屋」の復原が可能である。また、戦前の新聞紙などに、家屋と集落構成に伴う生活習慣の変容が見られて、今後の研究によって、さらに台湾原住民の住環境の変容過程及びライフスタイルの変動が明らかになれるのである。そのためには、建築学だけではなく、住居学、社会学、民族学、歴史学などの連携研究が必要である。</p> <p>そしてこの成果は、台湾原住民現地集落の集落景観及び歴史文化の保全などに活用できるのである。</p>
研究発表	<ol style="list-style-type: none"> 1. 呉イクエ、大場修「日本時代台湾原住民住環境の史的研究」日本建築学会大会（北陸）、2010.09 2. 呉イクエ、大場修「近代台湾原住民家屋改善に関する研究一アミ族を例として」日本建築学会近畿支部、2010.06 3. 呉昱瑩「日治時期至戦後初期花東地區阿美族「改造蕃屋」之初探」「當代亞洲新生代人類學議題趨勢與新研究取向」博士生學術論文研討會，台湾新竹：清華大學人類學研究所、2008 4. 呉イクエ、大場修「日本統治時代から戦後初期台湾原住民の「改造蕃屋」：アミ族を中心として」日本建築学会近畿支部、2009 5. 呉イクエ、大場修「日本統治時代から戦後初期台湾原住民の「改造蕃屋」：アミ族を事例として」日本建築学会大会（東北）、2009 6. 呉イクエ、大場修「日本統治時代の「台湾建築会」とその会誌について」『日本建築学会計画系論文集』第74巻第639号、2009